

#書評



AI時代に必要な 「知識の戸棚」となる一冊

評者 北野夕佳

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院
救命救急センター副センター長



《レジデントマニュアル》

感染症 レジデントマニュアル 第3版

藤本卓司・伊東 直哉・寺田教彦＝編

定価：5,500 円(本体 5,000 円＋税)

B6 変・600 頁／医学書院／2025

[ISBN 978-4-260-05780-6]

このたび、私が若いころから一方的に憧れだった「あの」藤本卓司先生から『感染症レジデントマニュアル 第3版』の書評を依頼されるという光栄にあずかりました。

まずページを開けてみると、書籍の構成にも藤本先生と執筆者の先生方の思いが詰まっていることがすぐに伝わってきます。

巻頭には臨床検体からのグラム染色の写真が「極めて簡潔な記載」とともに満載されています。グラム染色の「プレパレート作成」の、なかなか身につけにくい極めて実用的な手順が、痰を爪楊枝で樹脂状に広げるなど、これも写真付きで記載してくださっています。「グラム染色は『波打ち際』で見るんだよ」の記載は、藤本先生が横にいて直接 tips を教えていただいているような感覚を覚えます。「膨大な」記載の書籍は他にもあります。ですが、この本は「レジデント向け」あるいは「感染症を専門としない医師」でも抜け漏れなく必要十分な感染症診療ができることをめざして作られていることが伝わってきます。

第1章は「医療関連感染症予防の基本」について割かれており、これも患者さんにとっての「best interest of the patient」を最重要に考えておられる臨床家が作られた書籍であることを感じます。

第3章「抗菌薬の選択と投与方法についての考え方」、第4章「抗菌薬をいつ変更するか」、第5章「抗菌薬をいつ終了するか」は、臨床家が誰しも悩む・一生自信を持ちにくい状況について、藤本先生の臨床家としての何十年の叡智を詰め込んだ個人レクチャーを聞いているような感覚になります。

第10章「各種感染症」は、例えば髄膜炎の記載は「30分以内に抗菌薬投与」「内科救急である」「血培・腰椎穿刺・抗菌薬の状況による順番」「髄膜炎の身体所見の感度」「髄液 WBC の解釈」「髄液 PCR の脳炎パネルでカバーされる病原微生物のリスト」「曝露時の予防内服」など至れり尽くせりに記載してくださっており、この本は「感染症の教科書」であるだけでなく「内科の教科書」であると幸せな溜息をついていました。

他にも123ページ「高齢者の肺炎は、呼吸器症状を呈さないこともあるよ。好きなテレビを観なくなったなど『興味の低下』が表現型のこともあるよね」など、私は藤本先生が横にいて話してくださっているような錯覚を覚えました。

第10章の12、誰もが自信を持てない「真菌感染症」は、「臨床上重要な真菌は『カンジダ、アスペルギルス、クリプトコッカス、接合菌』の4つである」と冒頭で言い切ってくださっており、「カンジダは *C. albicans* か *non-albicans* で治療を分ける」など、読者・学習者の「頭の整理・頭の引き出し作り」をしてくださっていることがこの上なくありがたいです。

文字通り、初めから最後まで1ページも飛ばさずに通読しました。幸せな溜息をついています。どんなにAIに聞ける時代になっても自分の頭の中に「知識の戸棚」ができていないと「ちらかりまくった部屋」になります。その分野の「自分の一冊」を持つことの重要性を感じています。この『感染症レジデントマニュアル 第3版』に何度も帰ってきましょう。私もそうします。そうすれば、新しい知識を積み上げていける確固たる「土台」ができます。そして藤本先生と何度もお話ができます。

⑥